115 學年度第一學期 Eurasia 基金會(from Asia)國際講座
「亞洲共同體：東亞學的構築與變容」系列講次(3)
講題: 人的移動／文化創作—東亞文化交流史的一個面向
塚本善也
(2026.10.01)

摘要

本週邀請本校的塚本善也教授蒞臨授課，主要從電影與音樂領域切入，透過具體作品的介紹與分析，講述東亞文化交流史的一個面向。

1・序

講座一開始，塚本教授引用了德國文豪歌德、中國文學研究者吉川幸次郎，以及歷史學家山室信一三人所說過的話來切入主題。這些話語的共同點在於:「萬事萬物皆超越時間與空間，彼此相互聯繫。」以此為前提，本次講座提出了以下課題：

「從東亞文化交流史中，探討由跨越國界的人與人之間的交流所孕育出的文化創造實例。」

2・李小龍、西本正（賀蘭山）、胡金銓

接著，塚本老師首先介紹了香港的世界級電影明星李小龍（Bruce Lee）。眾所周知，他主演的《精武門》中有兩位日本演員參演；然而，塚本老師特別關注的是在《猛龍過江》與《死亡遊戲》中擔任攝影指導的西本正。西本正以「賀蘭山」的名義參與電影拍攝，同時也將先進的攝影技術傳授給香港電影界。

此外，武俠電影大師胡金銓也曾與西本正合作製作電影。塚本老師介紹了胡金銓的著作《隨筆》與《談電影》，並說明胡金銓對日本電影以及日本文化整體都抱持著濃厚的興趣與關注。

3・満洲国、満洲映画協会、山口淑子（李香蘭）、劉吶鷗、張我軍

西本正幼年時隨家人遷居滿洲國，之後在滿洲映畫協會學習電影技術。講座也由此轉而介紹滿洲國以及滿洲映畫協會的歷史背景。

滿洲映畫協會最具代表性的電影明星是山口淑子（李香蘭）。她在滿洲映畫協會時期所拍攝的作品，在某種程度上可說是日本在東亞推行殖民統治政策的文化表徵。

山口淑子的朋友之一是來自臺灣的小說家劉吶鷗，他同時也參與電影製作工作。除了劉吶鷗之外，在日本統治時期也有其他臺灣籍電影工作者活躍於電影界。臺灣文學史上著名的張我軍便是其中之一。

4・江文也、山田耕筰、「郷土訪問音楽団」

張我軍參與製作的電影《東洋和平之路》，亦獲得來自臺灣的音樂家江文也的協助。江文也以《臺灣舞曲》聞名，但除此之外，他還留下了許多音樂作品。塚本老師特別介紹了汪兆民（汪精衛）南京國民政府成立時，由江文也所創作的《東亞民族進行曲》。

1934 年，當時在東京留學的一群年輕臺灣音樂家組成了「鄉土訪問音樂團」，江文也也隨團返回臺灣。在此次返臺的過程中，江文也開始將臺灣視為自己的「故鄉」，並將其作為自己音樂創作的重要主題。

在東京音樂學校指導江文也的教師之一，是日本音樂界的泰斗山田耕筰。塚本老師一邊介紹山田耕筰的作品，一邊闡述他在日本音樂史上的重要地位與深遠

的影響。

5・伊福部昭、円谷英二、高野宏一、1960 年代的日台映画交流

江文也有一位作曲家好友伊福部昭。伊福部昭以《哥吉拉》主題曲聞名，而塚本老師也由此延伸到被譽為「特攝之神」的圓谷英二，以及圓谷製作團隊的特攝導演高野宏一。

高野宏一曾受邀赴臺灣，參與多部電影的製作。其中，被稱為幻之特攝作品的《戰神》便是代表作之一。

塚本老師接著展示了一份從戰後至 2000 年的日臺關係年表，指出在 1950 年代末期，日本電影重新獲准於臺灣上映；到了 1960 年代，日臺雙方合作拍攝了大量電影作品。同時，日本演員石原裕次郎與小林旭主演的電影也在 1960 年代受到眾多臺灣觀眾的喜愛。對於 1980 年代崛起的新一代臺灣電影創作者而言，這段日臺文化交流的歷史無疑成為其創作背景的一部分。

最後，塚本老師總結道：「文化會跨越國界，連結人與人；或者說，人與人之間的聯繫本身就能超越國界，而文化正是在這樣的過程中誕生。」他表示，本次講座所談及的內容，對於出生於二十一世紀的學生而言，或許聽起來如同久遠的歷史故事。然而，他希望大家能夠思考講座開頭所引用的三位學者共同傳達的意涵，也就是：「萬事萬物皆彼此相連。」

中文翻訳
CHATGTP
中文修正
陳順益

115 學年度第一學期 Eurasia 基金會(from Asia)國際講座
「亞洲共同體：東亞學的構築與變容」系列講次(3)
講題: 人の移動／文化の創作—東アジア文化交流史の一側面
塚本善也
(2026.10.01)

要旨

今週は本学の塚本善也教授を招き、主に映画と音楽の分野から具体的に作品を取り上げて、東アジア文化圏における交流史の一側面について講義してもらった。

1. 序

最初に塚本講師は、ドイツの文豪ゲーテ、中国文学研究者の吉川幸次郎、歴史学者の山室信一の三人がそれぞれ語った言葉を引用した。それらの言葉に共通するのは、「あらゆるものは、時間と空間を越えて、相連なる」ということである。これを前提に、本講義の以下の課題が提示された。「東アジアにおける文化交流史の中から、国境を越えた個人と個人との交流から生み出された文化創造の事例を見る。」

2．李小龍、西本正（賀蘭山）、胡金銓

塚本講師はまず香港の世界的映画スター李小龍（ブルース・リー）を取り上げた。彼の『精武門』に二人の日本人俳優が出演したことは周知の事実だが、塚本講師の注目は『猛龍過江』『死亡遊戯』で撮影監督を務めた西本正の仕事である。西本は「賀蘭山」名義で映画を撮りながら、香港に撮影技術を教授した。

武侠映画の巨匠胡金銓も西山正と映画製作を行った。塚本講師は胡金銓の書籍『随筆』『談電影』を紹介し、彼が日本映画や日本文化全般に強い関心を抱いていたことを語った。

3．満洲国、満洲映画協会、山口淑子（李香蘭）、劉吶鷗、張我軍

西山正は幼少時に家族とともに満洲国へ移住し、その後満洲映画協会で映画技術を学んだ。そこで講義は満洲国および満洲映画協会の説明へ移った。

満洲映画協会の最大の映画スターは山口淑子（李香蘭）である。彼女の満洲映画協会時代の作品は、まさに日本の東アジア植民地統治策を表象するようなものだった。

山口の友人の一人に台湾出身の小説家劉吶鷗がいるが、彼は映画製作にも携わった。劉以外にも、日本統治時代の台湾人映画製作者はいる。台湾文学史に知られる張我軍はその一人である。

4．江文也、山田耕筰、「郷土訪問音楽団」

張我軍が関わった映画『東洋平和の道』には、台湾出身の音楽家江文也も協力した。江文也は「台湾の舞曲」で知られるが、そのほかに数多くの作品を残した。塚本講師は、汪兆民（汪精衛）の南京国民政府成立の際に江文也が作曲した「東亜民族進行曲」を紹介した。

1934 年、当時東京に留学中の若い台湾人音楽家によって「郷土訪問音楽団」が結成され、江文也もともに台湾へやって来た。その際に江文也は台湾を「故郷」と認識し、自分の音楽作品の主題とした。

東京音楽学校で江文也を指導した先生の一人に、日本音楽界の大御所山田耕筰がいる。塚本講師は山田耕筰の作品を紹介しながら、日本音楽史における山田の大きな存在について語った。

5．伊福部昭、円谷英二、高野宏一、1960 年代の日台映画交流

江文也の友人に作曲家伊福部昭がいる。伊福部は『ゴジラ』の主題曲で知られるが、そこから塚本講師の話は「特撮の神様」円谷英二、円谷組の特撮監督高野宏一へ展開した。

高野は台湾に招かれ、多くの映画製作に携わった。幻の特撮作品といわれる『戦神』はその一つである。

塚本講師は戦後から 2000 年までの日台関係年譜を提示して、50 年代末に台

湾で日本映画が解禁され、60 年代には日台協力によって多くの映画作品が制作されたこと、日本の俳優石原裕次郎や小林旭の映画は 60 年代に多くの台湾人に見られたことを語った。80 年代に登場した若い台湾人映画作家に、そうした日台関係の歴史が流れているだろう。

最後に塚本講師は「文化は越境し、人と人を繋ぐ。あるいは人と人の繋がりは国境を越える。そこに文化は生まれる」と述べた。本講義内容は 21 世紀生まれの学生たちには昔話のように思われるかもしれないが、冒頭の三人の言葉に提示したように、「あらゆるものは相連なる」という意味を考えてもらいたいと希望した。

日本語整理
塚本善也